



突然だが「GIGAスクール構想」をご存じだろうか。これは2019年に文部科学省が打ち出した構想で、平たく言うと児童生徒向けに1人1台のタブレット端末を配布し、個別最適化された創造性を育む教育を全国の教育現場で持続的に実現させていくというものだ。

前回の記事「高齢者のデジタル化」においても「Second Step」という言葉を出したが、変化の激しい時代を生きる子どもたちにとって、デジタルを基盤とした先端技術の活用は必須だ。コロナ禍の影響もあって、端末導入等の準備は急ピッチで進められており、全国各地で「端末が届いた！」という声が続々と上が

この連載も第3回を迎えるが、今回のお題は「学校のデジタル化」である。私の所属法人トナリノでは、児童向けにプログラミング教室を開催したり、学校と地域のコーディネーター役をしたりと、教育分野の活動実績が多数ある。今回はそれらで培った現場視点を入れつつ、書いていきたい。

③学校のデジタル化



児童向けのプログラミング教室の様子。親子で参加し、法人職員がサポートをした

っている。

しかしながら、急ピッチに進んでいるのは「端末の導入」であって、その端末を扱う学校と教諭の準備は間に合っていないのが実情だ。コロナ禍の影響であらゆるデジタル化が前倒しになっているが、平時でも多忙な教諭たちは休校等のコロナ対応でさらに多忙になっている。そのため「端末を使いこなすための学習や

準備」が追いついていないのである。見た目上のデジタル化は進んでいるが、実際の現場である「学校のデジタル化」は遅々として進んでいないのである。

多忙な教諭を支援するため
の制度として「ICT支援員」
「GIGAスクールサポーター」
がある。詳細は割愛する
が、どちらも「学校のデジタ
ル化の支援をする存在」であ

り、環境やマニュアルの整備、日常的なデジタル化の支援に対応をする。ICT支援員は、2022年度までに4校に1人を配置する国の目標もあるため、最近注目度が増してきており、各企業による資格取得と参入が進んでいる。私が感じる問題点としては、そもそもの支援者数が少ない、という問題がありつつではあるが、支援する側の教育に関する経験値が少ないため「端末をうまく使う」ことが目的になりがちなことだ。あくまで子どもたちの教育と教諭の支援が主にあるべきなのだが、彼らは「デジタルの経験値は豊富、だけど教育は未経験」なことが多いため、どうしても「端末をうまく使う」ことにとらわれがちなのである。

国策として急速に進む「学校のデジタル化」は、実は中心



執筆者
トナリノ代表理事
佐々木信秋

【一般社団法人トナリノ】SAVE TAKATA（セーブタカタ）が前身組織。「あなたの困りごと」を一緒に解決する「地域の相棒」として、ウェブサイトやチラシなど広報物の作成、商品開発や販売など営業活動、デジタル人材の育成など幅広い活動を展開している。事務所は高田大隅のたまご村内のワーキングスペース「ヤドカリ」。電話番号は47・3287。

となる子どもたちと教諭を置き去りにしている感拭えない。トナリノは4人のICT支援員資格保持者が在籍しているが、地域に根付く法人として、あくまでも子どもたち、そして学校と教諭に寄り添う存在でありたいし、そうあるべきだと強く思うところである。